手巻き、という種類の時間

片岡義男
（作家）

アメリカにハミルトンという時計会社がある。ここが製造している腕時計にカーキーというシリーズがあり、このなかのメカニカルと文字盤に英文字で表示してある腕時計を、僕は使っている。この夏で三年になる。メカニカルとは、機械式、つまり手巻きということだ。

僕は十歳のときに初めての腕時計を、自分のものとして持った。アメリカ陸軍からの戦後の放出品を父親がただ同然で手に入れてくれた。この腕時計がハミルトンの手巻きだった。二十代なかばまでいつも左手首に巻いていた。誰かに熱心に所望され、進呈した記憶がかすかにある。

この最初の腕時計と、まったくと言っていいほどにそっくりなハミルトンの復刻品を、四十年ほど前に手に入れた。子供の頃の最初の腕時計が、新品になってどこからか蘇ったような印象があった。数年は使ったように思う。いまも僕の手もとにあり、巻き上げれば作動する。

このハミルトンの復刻版をはさんで、二十代の後半から三年前まで、いったいどれだけの腕時計を手に入れては、人に進呈してきたか。いま残っているのは、ハミルトンのカーキーも含めて七個だ。三十年ほど前のセイコーファイヴの自動巻きは文字盤のデザインがたいそう気に入っている。ボッチアとマラソンのクオーツも、デザインが捨てがたい。あとはすべて手巻きだ。アダナックの軍用腕時計。すでに述べたハミルトンの第二次大戦モデルの復刻版。そしてマラソンの手巻き・自動巻きのデュアルだ。いま使っているハミルトンの手巻きは、風防ガラス面の直径が三十三ミリだ。マラソンの手巻き・自動巻きは二十七ミリなので、いつも使うのはひょっとしたらマラソンになるかもしれない。ガラス面の直径が三十ミリを越えると、僕の好みとしては大きすぎるからだ。ハミ

ルトンの三十三ミリは上限だ。
いちばん最初にさよならしたのはクオーツによるムーヴメントの腕時計だ。いま残っているマラソンとボッチアのふたつは、デザインが好みどおりであるという理由で、手もとに置いてある。こうなるまでに、クオーツの腕時計を、いくつ遍歴したことか。
クオーツは電池が動力源だから、電池がなくなると止まってしまう。電池がなくなって止まったクオーツの腕時計が教えてくれるのは、いくらデザインが好みの腕時計でも、じつは自分とは何の関係もないままに、電池を動力源にして作動していたのだ、という事実だ。元気に動いているときでも、一秒ごとに動いている秒針を見ると、そのつど、自分との関係のなさを、痛感せざるを得なかった。
クオーツによる腕時計とまず別れたのは、このような理由による。文字盤が好みのデザインになっている腕時計はクオーツに多い。文字盤が好きだから、というだけの理由で、クオーツの腕時計をいくつ買ったことか。
セイコーファイヴのような自動巻きの腕時計においては、自分の動きによってゼンマイが巻き上げられていくのだから、自分の動きがその腕時計にとっての動力であり、文字盤の二本の針で知る時刻は、そのまま自分の動きの証明なのだ、という理屈を考え出し、この理屈に自分を支えさせて、自動巻きの腕時計を使っていた時期もあった。
自動巻きの腕時計は、しかし、朝から晩まで装着していても、自分の動きだけでは、動力源としては不足があるようだ。巻き上げるための動きを定期的におこなわなくけはいけないし、手巻きの機能もついているなら、手巻きで自動巻きを補っておく必要がある。
そうであるなら、と僕は考えた。指先でリュウズを巻いて時計内部のゼンマイを巻き上げる、手巻きだけの腕時計を使うのが、もっとも理にかなっているのではないか。朝、その腕時計を左手首につけるとき、リュウズをいっぱいに巻き上げておく。夜、寝るとき、腕時計をはずす。そのときにもう一度、リュウズを巻き上げる。一日に二回、こうして自分の指先によって、手巻き式腕時計のゼンマンは、巻き上げられていく。これでいいのではないか、という考えかたは、さほど時を置くことなく、これしかないはずだ、という結論に落ち着いた。
十歳のときに父親があたえてくれた最初の腕時計が、手巻きそのものだった。そこから半世紀を越える時間をかけて、僕は手巻きの、しかもハミルトンの腕時計へ、戻ったのだ。手巻きの腕時計が時を刻むことに、一日にリュウズを二度巻き上げる僕は、直接に関与している。二本の針で知る時間の経過や、その結果としての時刻など、自分の時間だとまでは言わないまでも、腕時計が動くことに、直接に関係していることだけは、確かだ。手巻き式腕時計の秒針の動きが僕は好きだ。その動きのなかに、自分が関与した証拠を、僕は見ているに違いない。

文化の違い・国土の違い

宮地智子
（詩人）

アメリカに十年間暮らしていた娘一家が、ようやく帰国して一年程経った。

彼らがあちらに居たときは、一年に一度、私は孫たちに会いに行き一か月程滞在したものだった。その時期は決まって春。日本から来て住み込みで働いていた、オーペア（ベビーシッターをしながら英語を学ぶ若い女性）の交代する時期であった。

娘がニューヨークで第二子を出産したときも春。晴れた日の続く桜の盛りのとき、この地では花曇りなどという日本ではよくある気候とは無縁の、くっきりと青い空に、濃いピンクの何という種類の桜か、その花が、イーストリバーの両岸を綺麗に飾っていた。

向こう岸に、超高層ビルの林立するマンハッタン島が手の届くところに見えるここ、ルーズベルト島は、静かな新興住宅街であり、十数階建てのマンションが行儀よく並んでいて、どの棟の敷地にも目に鮮やかな緑の芝生が広がっていた。

アメリカ人は、この、緑の芝生を殊の外、大事にするのである。

アメリカが人種の坩堝（るつぼ）だということは、この地に足を踏み入れた途端、しみじみ実感することである。孫を連れて近くの公園に行ったときなど、よく話しかけられるので、外に出るのが憂（ゆう）鬱（うつ）になる程であった。こちらは日本人のつもりでいても、向こうは当然、英語の通じるアメリカ人だと思っているので、まず始めに、どうかゆっくり話して下さいという断りを入れなければならない。

夫婦共働きは普通なので（近頃は日本でもそうなりつつあるようだ）子供は保育園に預け、ベビーシッターに預ける。

公園で、ベビーカーに乗せられたままの赤ン坊が泣いているのを横目に、あらぬ方向をぼんやりと眺めている女の人もいる。その赤ン坊の顔を見ると、本当に悲しそうな、いかにも愛情に飢えた、子供ながらに、やつれた表情をしていて、胸が締めつけられる思いがする。これは特殊な例としても、私の孫達もまた、祖母である私が、一年のうちほんの数十日、かまってやるだけで、殆んどの日々は保育士さんやシッターさんのお世話になっているのである。

こういった子育てのあり方は、決して嘆くべきものではなく、賢い、先進性の顕れであると、私は認めざるを得ない。時代が大きく変ったのである。アメリカの合理性は、日本人が多く学ぶべきところだろうと思う。

子供は国を挙げて皆で育てるのでなければきっと、国は滅びる。

一家がボストンに移っても、中西部のミシガン州に移っても、祖母である私のしごとはまことにささやかであ

る。殆んどが家の中に居て、言葉を交すのは、孫達のお稽古ごとの先生や、保育園や学校の先生、電化製品の修理に来る技術者。皆、優しい人ばかり。あるいは、ベビーシッターのアルバイトとしてやってくる女子大学生。アメリカでは、車の運転のできない私に代わって、学校や保育園への送り迎えや宿題の手伝いをやってくれる。

アメリカでは、国の法律によって、子供は十二才になるまでは保護者同伴でなければ外に出られないので、シッターが必要になり、従って子供たちが夏休みに公園などで遊ぶときも、必ず大人が付き添うことになるのである。

アメリカの大学生は普通、学費を自分自身で賄うので、アルバイトは必須であるのだろう。それで、ベビーシッターの担い手に、女子大学生が多いのである。（たまたまだったのか、男子学生は見かけなかった。）

新しく、その、アルバイトの女子学生が、面接を受けに、娘の家にやって来ると、こちらがまず驚くのは、二十才（はたち）そこそこの彼女たちの、自分自身を売り込む、堂々とした態度である。まず、子供とことばを交わす。子供と信頼関係を築くことをアピールするのである。

娘一家が十年間住んだうちの後半の五年間を暮らした中西部ミシガンの州都であるランシングは、ミシガン州立大学を中心とする街であり、街全体が愛校心に富んでいて、隣り街にある、超一流と言われるミシガン大学に対抗心を持っている。けれど日本人である私としては、ミシガン州立大学の、日本人としての卒業生のなかの筆頭に、南方熊楠の名が挙げられることが何より誇らしい。津本陽著『巨人伝』によると、熊楠は、明治二〇年頃ランシング農学校に学んだとあるが、これは今のミシガン州立大学の前身であろう。しかし、入学したものの、ヤソ教を嫌い、学校へは行かず、専ら林野を歩き回り、植物や鉱石の採集をし観察した、とある。日本にはない珍しい動植物が熊楠を夢中にさせたことは百年以上経った現在でも容易に想像できることである。

芝を敷きつめた人工的な庭の片隅にも、秋になると紫色の小菊や橙色のつりふね草や、真白いレースフラワー、日本では見たこともない、白いつり鐘を変形したような花…。

アメリカの人達が大切にしているこの芝生を剥がしたら、どんなにか豊かな色彩の花畑が出現するだろうか。いや、猛烈な勢いで蔓延（はびこ）るたんぽぽやせいたかあわだち草の領分となるか。

私にはこの先、もう訪れることのない美しいこのアメリカの国は、わが孫達にとって、いつか帰りたい故郷なのであろう。

東京の、根津（ねず）神社の傍に移り住んで日本の四季をひととおり経験した、この小さな者たちは、大人になって二つの国籍のうち、どちらを選ぶだろうか。

私が、日本人になってもらいたいと願うのは、なぜか、自分自身でもわからない。

向日葵

中西美子

最も夏らしい花、ひまわりは、この頃一年中、花屋の店先で見かけるようになりました。店の人に聞いてみると、若い人にとても人気があって、結婚式は、もちろんあらゆる場面で、ひまわりのブーケがもてはやされているそうです。明るくてポジティブなイメージは、良いものです。

ひまわりの花が太陽に向かって動いていると思っていませんか。成長した花は、ずっと東を向いているそうです。ソフィアローレンとマストロヤンニの映画「ひまわり」のラストのひまわり畑の美しいシーンを思い出します。どのひまわり畑の写真を見ても同じほうを向いています。東日本大震災の後、ＪＲの駅前でひまわりの種を配っていました。セシウムを吸収してくれるので除染の効果があると言われていましたが、残念なことにそのような効果は、なかったそうです。種は、良質な食用油になり、炒めると酒のつまみでたべることもできる。見てよし食べて良しの優秀な植物です。最近では、花の形や色も多彩になっています。レモンイエローから茶色まで色の幅も広がり、店には「ゴッホのひまわり」として飾られているものもあります。

デザインに沿って立てた銀線の間にえのぐを入れていく行程。

香川に伝わる伝統技術

七宝［しっぽう］

七宝作家　近藤裕美子

多彩な色を用いて表現される「七宝」は、陶器のように見えるが、金属を素地とする焼き物である。その歴史は古く、正倉院に納められている銅鏡の裏面や、ツタンカーメンの黄金の仮面も、七宝で彩られている。何百年の時を経て、なお失わない輝き。その美しさに魅せられて、七宝の世界に足を踏み込んだのが、近藤裕美子さんである。

何色もの絵の具を使って彩っていく。

一人での試行錯誤と幸運な出会い。そして最短で正会員へ。

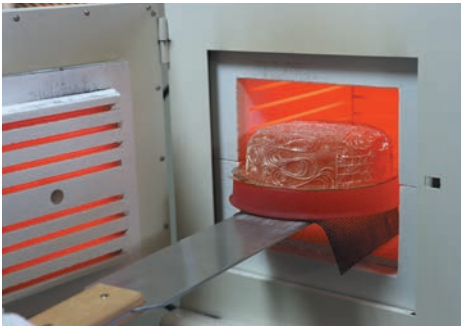
近藤さんが七宝を始めたのは、中学の美術教師をしていた約30年前。その美しさに魅了されたことと、生徒によりよく美術を伝えるために「自分自身も感性を鍛えなければならない」という信条からである。それから数年は一人で試行錯誤していたが、信頼できる先生との出会いにより才能を開花させていった。

工芸の世界で特別な権威がある展覧会は「日本伝統工芸展」である。ここで入選すれば「日本工芸会」の準会員と認められ、4回入選で正会員となる。平成15年に初出品した近藤さんは、いきなり入選。そこから4年連続入選し、最短で正会員となり、以降も腕を磨き続け、多くの賞を受賞している。

《花器》
余白のある上部から密度の高い下部へ。
色にもデザインにも流れがある。

真剣なまなざしで作業に打ち込む近藤さん。七宝は前の工程にもどることができないので、
ひとつひとつの作業を正確に終わらせて、次の段階へと進んでいく。

目の細かい砥石で表面を磨くことで美しい輝きが生まれる。
根気のいる作業である。



何度も窯で焼きながら色を加える。途中で銀線がズレたりすれば、
最初からやり直す。

よりよい茶道具を作るため、お点前の修業にも通っている。

《香合》
ラウンド型の作品には、違和感なく銀線を曲げる高度な技術が生かされている。

《合子》
枠どられた形の中に、それぞれ違うデザインが散りばめられている。

時を超えて愛される作品を目指して。

七宝の魅力について近藤さんは「技術と感性の両輪が求められること」だという。複雑な工程を経て完成する七宝は、技術の裏付けがないと自分の表現を形にすることができない。各作家はそれぞれ、自分だけの工夫で表現の幅を広げており、近藤さんにも独自の技術がある。七宝は、感性と技が強く結びついている芸術なのである。

現在の近藤さんのテーマは、時を超えて愛でられる物をつくること。いつまでも美しさが変わらない七宝だから目指せる目標である。

昨年開催された近藤さんの個展には、多くのファンが訪れた。

旅のスケッチ

型絵染とヨーロッパの関わり

さかもと　ふさ
（型絵染版画家、エディター、イラストレーター）

「さかもと　ふさ　型絵染版画展」六本木の江夏画廊で二〇一七年五月二十五日～六月七日までの展覧会が終了し、成功であった。二極化している日本と、そして本物志向になってきたということを実感した展覧会であった。

「型絵染」とは染色技法の一つで、型紙を用いて着物の技法を使い布に染めたもの。同じ技法で型紙を用いて和紙に染め出しものを「型絵染版画」と呼んでいる。

型絵染の型紙が十九世紀後半に海を渡って欧米にもたらされ、当時ヨーロッパでは美術工芸改革運動が盛んで、繊細で斬新なデザインの型紙は美術工芸家達に大きな影響を与えた。

英米ではウイリアム・モーリスの文様に見られ、米ではフランク・ロイド・ライトの仕事にもみられた。フランス語圏ではアールヌーヴォーと言われ、ガレの作品にも菊の花がデザインされている。ドイツ語圏ではユーゲントシュティールと言われて、ホフマンのイスの背もたれが市松模様、これは着物の柄に多く見られる。現在でも英国のプリントンズカーペット社は芭蕉布のカーペットが人気商品である。

さかもと　ふさ　型絵染版画　夕陽の中

人間的に解釈せざるを得ない

志村栄至（栄守改め）
（評論家）

アメリカの変貌に驚いていたら、伝統あるヨーロッパの国でも、自虐的で、しかも他人を巻き添えにする事件が頻発する時代、自国の安寧は、何にも増して有難いことか。

しかし、気になることはある。昨今は事件の相貌が、想像力を欠くとしか思えない精神の仕業か、そんな風に推測させることだ。人間の精神性に変化が起こりつつあるとしたら、手を拱いてはいられない。

小林秀雄は、晩年期に至ってからは、対談等を含め、いろいろな機会で、平易な言葉遣いで思想を披露してくれた。

「思い出すことは想像でしょう。思い出すってことはどういうことかっていうと、人間が持って生まれた、これがなけりゃ人間じゃないといっていいくらいな、人間に備わった一つの能力でしょう。なぜ、みんなこれを捨てるのか。」

日常会話風で卑俗そのものだが、これが想像できない大事へと結果的につながって行くから、この人の言葉は油断できない。しかし、こんなところにもいつもの難題が横たわる。

「作品の根底にある思想を、明らさまに語れば、お目出度いと笑はれるに違ひない事もよく知っていた。」（『政治と文学』）

ドストエフスキイに言及したところでこう書いているが、これはそのまま小林自身にも言える。「明らさまに語れば云々」は、まったくその通りが、小林の自戒の言葉でもあるのが難ましいと言わざるを得ないのだ。

そんな諸々を勘案し、この際、半可通を自認しつつ、ペンの赴くまま日頃、胸の内に巣くうことを言葉にしてみたい。

まず、世相で小林の名が出ると、ほとんど帯同して、『徒然草』と『無常といふ事』という二作品がとりあげられる。あたかも〝代名詞〟でもあるかのごとく。これには少々、違和感を覚える。確かにこの二作品は小林の〝空間論〟と〝時間論〟ではあろうが、代表作とまでは言えないだろう。

小林を流れる二大潮流は、ベルクソンとドストエフスキイと決め付けているが、両作はごく若い頃、前者から受納した、「時間も、空間も心も物も一切ひっくるめて自然といふ一つの持続体として、この世を理解したベルクソンには、（以下略）」（『ナンセンス文学』）という認識が、自国の古典というところで語られただけ、と言えるからだ。

「太田道灌が未だ若い頃、何事につけ

心おごれる様があったのを父親が苦々しく思ひ、おごれる人も久しからず、と書いて与へたところが、道灌は、早速、筆をとって横に、おごらざる人も久しからず、と書いたといふ逸話があります。」

これを前振りとして、『私の人生観』には、小林を語るに際して、その思想のコアと大仰に言葉を使いたい大事が、こう出て来る。

「この逸話は、次の様な事を語ってゐる。（中略）全く心ない理法といふものを、人間の心が受容れる事はまことに難かしい事である。さういふ事を語っております。」

この先は、「明らさまに語れば、お目出度いと笑はれる」と書いた人の文章であることを、十分に心して読むことが求められる。

「私達の心の弱さは、この非人間的な理法を、知らず知らずのうちに、人間的に解釈せざるを得ない。」

全文を引用していないうえ、小林に関しては一見の読者の方もおられると思うので、曲解を回避するため、書かねばと思いつつ書けなかったことを、思い切って言葉にする。

それは、ここの「非人間的」、つまり〝人間に非ず〟が、世間一般とは真逆の意味を託されて使われていることだ。この時、小林の使った〝人間に非ず〟とは、〝神〟を示唆している。合わせると、〝神の理法〟と置換できることだ。以下が、それを裏付ける。

「因果律は、その全く非人間的な姿で、私達の上に君臨してゐる。といふ事は、私達が、まともに見る事が出来ぬものから、眼を外してしまったといふ事だ。」

「まともに見る事が出来ぬもの」、もちろん、「明らさまに語れば」との自戒が、小林にこう書かせていることは明白だ。もどかしくも思えるが、このあたりで、小林に刺激されて動員する私達の想像力が経験する緊張感は、結果的に大きな成果をもたらす。

遠くに、あるいは他人事と見ていた小林の思想が、私達庶民感覚のごく近くにあると察知される時の喜びは、とてつもなく大きい。

ここで、世相へと目を転じると、日々、様々な悲喜劇が目に飛び込んで来る。中でも、善良な人が遭遇する事件・事故は理解に苦しむ。しかし、そんな時こそ、小林が示唆する、隠れるように存在する〝神の理法〟に思いを馳せるべきでは、と思えて来る。

こだわるが、真面目で不正を嫌忌する人が、この世で唯一、出くわす〝躓きの石〟があるとしたら、その遠因は、小林の叫喚した〝神の理法〟との関係にあるのではないかと。

「ドストエフスキイは『罪と罰』で、（中略）罪といふ言葉、罰といふ言葉を発明せざるを得なかった個人と社会との奇怪な腐れ縁を解剖してみせてくれたのだ。」（『断想』）

あのロシヤにも、見え難いこの関係を心眼で見届けた先人が居たこと、小林の使った「発明」という言葉には、その慧眼へのリスペクトが感得できて、心なごむ。

さらば愛しき人よ

佐川毅彦

沖縄タイムス社のギャラリーで絵画の展覧会をする。前回稔（みのる）の絵を二点展示してやったら調子に乗って今回も参加してきた。しかも一正（かずまさ）もつれて、さらにヤツのなじみの飲み屋の亭主の弟の遺作五点もってきた。

車がない。免許はあるが私はまともに運転ができん。今回は絵を運ぶのに稔の車が頼りである。彼のデザインしたポスターや案内のハガキはあまり出来がいいとは思えないが、我慢するしかない。

準備ができたので、彼の車で、ポスターの貼れそうな所や、ハガキを置いてもらえそうな所へお願いにゆく。

まず、大通りに面している友人の居酒屋のドアのそばにベニヤ張りのポスターを取りつける。稔はリューマチで、運転とベラベラしゃべるだけで、手作業や力仕事などは一切しない。

次に那覇市にある県営博物館にハガキを百枚ぐらい置いてもらう。ここは人の出入りの多い所である。（十五日後に来てみたら、案内のハガキは一枚も残ってなかった）

そして展示会場になる新聞社の受け付けのデスクの上にハガキを届ける。左斜め向かいに沖縄最大のデパート、リウボウがある。そこの六階にある市営のギャラリーにもハガキを置かせてもらう。

さて、大学の生徒が絵を観に来てくれるのを大いに期待して、首里城のとなりにある沖縄芸大へ向かう。

稔は数年前に一度来たというが、駐車場がわからん。大学の事務所への矢印を見つけたので、そこに車を止めた。私だけ降りて事務所へゆくと受け付けに誰もいない。声をかけると若い女性がでてきた。

〝七月に絵画展をやるんですが、ポスターを貼ってもらえないですか〟とお願いした。

その娘は奥にいる年配の女性のところへ判断を仰ぎにゆく。私からは二人の後ろ姿しか、見えなかった。

こちらに来たら、取りあえず二枚預かっておくと言う。貼ってもらえるかわからんような言い方である。ポスターを二枚渡しながら、〝まちがいなく貼ってもらえないだろうか〟と言うと、ポスターを持って、

又、上司らしい女性の所へいく。そして、戻ってくると〝ハイ、大丈夫です〟という。案内のハガキも置いてもらえた。

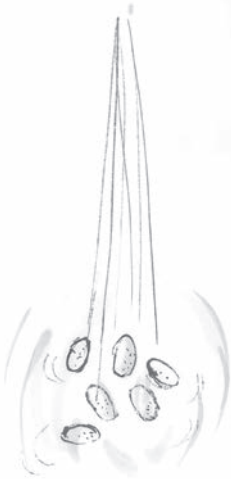
〝ありがとうございます〟と帽子を取り頭を下げて、私は事務所を出た。

その時、後ろ姿の上司のイスが回転して、私の去った方を向いた。その年配の女性は私が女性を描く時、いつも思いうかべる顔をしていた。(それを私が知るのはかなり日にちが過ぎてからである)

次はシーサーを作っている一正の会社にポスターを持っていって…後は与儀の図書館を回ってそれから…

「お蚕さま」と「富岡製糸場」

永岡　慶之助
（作　家）



サクサクサク、耳をすますと「お蚕さま」が桑の葉を、一心不乱に食する音が聞こえる。緑色をした桑の葉の上や下で、純白色の「お蚕さま」が、モゾモゾ動きながら食事中だ。掌の上に乗るほどの小さな身体で、一日に三回から四回、多い時は五回も、新鮮な桑の葉を食べつづける。

平成生まれの若者たちが、早三十歳になろうとしている。彼らはもとより、昭和後期に生まれた人達でも、「カイコ」を見たことがある者は、どれくらい居るのだろう。

昭和の終わりぐらいまで、郊外に行けば、桑畑や畑の境界などに桑の木が植えられていた。まだ道路が整備されていない地方に行くと、畑と畑の間を車で通り抜けたときに、一桑の枝が、ガサガサ車体を擦る音がしたものだ。「お蚕さま」の食べる桑の木の花は、ほとんど人目に付かない、小さな穂のようなもので、四月から五月にかけて咲き、六月頃になると、黒紫色に熟した実になる。甘い物が少い時期であるから、子供たちには、かっこうのおやつとなった。桑の実を口に含むと、甘酸っぱい味がして、口の中や唇が真紫色になり、手や指や衣服までもが紫色に染まって、洗っても〳〵なかなか落ちなかったことを思い出す。

新暦の五月二十日頃から六月の一週目ぐらいまでを二十四節で「小満」、七十二候では、二十二候の初候『蚕起食桑』。昔の人々は「お蚕さま」が、この時期、桑の葉の食べっぷりが良くなると知っていたのだ。

蚕は卵からふ化すると、桑の葉を食べながら、脱皮を四回繰り返した後、「蛹（さなぎ）」になるために、約二昼夜かけて「繭（まゆ）」を作る。

群馬の知人から、その親戚の養蚕農家の話を聞くことができた。昭和五十年代まで、養蚕を生業（なりわい）としていた、その農家のお宅では、「お蚕さま」が繭を作り始めるまで、寒さ、熱さ、湿気に弱く、他の生き物の餌になりやすい「お蚕さま」を守るために、養蚕の時期になると、田の字型の間取りの家の南側の日当りの良い二部屋は、「お蚕さま」用。家族たちは北側の日当り

の悪い部屋で寝起きする生活を送ったという。無事「お蚕さま」が育ち、桑の葉を食べなくなり、繭を作る準備に入った頃、二階部分に作った蚕室に「お蚕さま」を運び上げる作業にとりかかる。これを「上蔟（じょうぞく）」といい、次の養蚕が始まるまで、ようやく座敷を使うことができたのだそうだ。

養蚕農家で繭となった蚕を集め、生糸にし、精錬したものが、高級天然繊維である絹糸となる。明治時代になり、資源の少ない日本が外貨を得るために目をつけたのが、絹糸・絹製品だった。そこで国家的プロジェクトで、絹糸の大量生産をはかろうと、官営の工場建設を推進させた。二〇一四年に世界遺産に登録となった「富岡製糸場」が、それである。

僕は二十年ほど前の、富岡製糸場に行っている。その時はすでに、操業は停止されていて、製糸場の周囲の道路を含めた全てが、町と融和せず、まるで異空間に存在する建造物のような印象であった。時間が止まっているかのような静けさの中に立たずんでいた。

その後、富岡製糸場を、昭和十四年に引き継いだ片倉工業の一族と町の人々の尽力により、維持管理され、世界遺産登録を目ざしていたことは知っていたのだが、訪れる機会がなかった。

今年のゴールデンウィーク中に、富岡を訪れた観光客の人出は、まるで、東京は原宿のようであったという。

五月末、そろそろ観光客も減ったのではないかと、意を決して富岡へ行く。それほど気負い込むほどの事ではない。なに、僕の住んでいる藤岡からは、国道２５４号で十五キロほど、車で三十分ぐらいかな？利根川に合流する鏑（かぶら）川の南に広がる田園地帯を走る。桜の季節は過ぎ、麦は黄金色、もうすぐ田植えの時期である。

富岡は、一六一六年（元和二年）前田利家の五男利孝が、七日市藩一万石を拝領し、一八七一年（明治四年）の廃藩まで、十二代続いた加賀藩の陣屋があった所である。現在は、県立富岡高校の敷地になっていて、中門と正殿が保存されている。

富岡製糸場は、富岡高校から南東へ一キロほどにある。上信電鉄富岡駅から約八〇〇メートル、駅から歩いてみる。道路は新しく舗装し直され、ところどころウッドデッキの「お休み処」があり、花で飾られ、ベンチやイスが置いてある。

製糸場の中は、観光客が少かったせいか、タイムスリップ感はあるが、よく手入れされ、懸命に修復を心がけている最中でもあった。全館の中は、まだ見学することは叶わなかったが、外廻りから良く見ることができた。

首長館（通称ブリュナ館）は、外観からも珍しく、高床式で回廊のベランダがあり、地下室もあるという。一度入ってみたいと思う。裏手に廻ってみると、河岸段丘の上に位置していることが良く判る。敷地の端に、大きな桜が並木となっている。桜の花が咲く頃に、また来ることができたらなと思いながら帰途に着く僕だった。

宅配牛乳

山本千明
（ＥＣＣ英会話講師）

お気に入りの店だったのに、心の中のリストからこっそりと「削除」する瞬間がある。

味も雰囲気も素晴らしくスタッフの方々も常に笑顔でサービス満点！ところが最近、徐々に顔ぶれが変わり対応が変化してきた。

ある土曜の夜。訪ねてきた懐かしい友人と話が盛り上がり、せっかくなのでこのままどこかで外食しよう！という流れになった。週末の夜はその店の予約が難しいとは重々「承知の助」である。案の定、電話に出た男性から「今日は満席です」とのお答え。「一、二時間待っても無理でしょうか？」と訊くと「申し訳ありません。満席なので」と、「満席」押し。電話を切った後に耳に残ったのは、どこまでも紋切り型の抑揚のない「満席です」の声だった。どうせ「ダメ元」の問い合わせである。忙しくて余裕のない時間帯だったのかもしれない。それでも、せめて「誠に申し訳ございません。またのお越しをお待ちしております」みたいなセリフを「心のこもった声」に乗せていただければ、迷わず「またの機会」を考えただろうに。

何でもスマホで検索して「評判」も覗いてそのままネット予約できてしまう便利なご時世だけれど、私は先ず、少しどきどきしながらも（忙しくないであろう時間帯に）電話をかけてみる。電話を取るタイミング。第一声のトーン。電話の向こうから漏れ聞こえてくる音楽や音や人のざわめき。予約した時の「復唱」の有無。短いやり取りの狭間に様々なものが透けて見えてくるからだ。そして「このお店の人は感じが良い」と思えた先には不思議と「居心地の良いお店」が存在している。活舌が良いとか声が明るい、という単純なものではなく、例え小声でも、たどたどしくても総合的に「ウェルカム」な気持ちが感じられるかどうかが判断基準となる。もちろん、こちらとしても「招かざる客」にならないよう、人としての礼儀正しさは必須。お互い「対応力」の勝負である。

最近、「相手側の応対」のせいで困った問題が発生してしまった。

我が家は十年ほど前から「宅配牛乳」を二社にお願いしている。

「Ａ社」は知り合いの知り合いに頼まれて。

「Ｂ社」は五種類もお試し商品をい

ただいたのでつい…（思うツボ状態）

そもそも宅配の牛乳は、味は良いが市販のパック牛乳よりも少々「お高め」なので、我が家の経済状況に合っていない。しかも勝手口に二ブランドの牛乳ＢＯＸが仲良く並んでいるおかげか（この家の人は断り下手ですよ～と宣伝しているようなもの）飛込営業の方々がちょくちょく寄って下さる。ピンポ～ンの音に「宅配の荷物かな?」と出て行って、その都度丁重にお断りするのも結構面倒だ。

よし！二社の牛乳を順次お断りしよう！

そう決めた頃の出来事。

Ａ社さん宛ての集金袋を指定日に牛乳ＢＯＸに入れ忘れていたことに気が付いた。（未だに現金をＢＯＸに入れておく長閑な昭和集金方式）これはいい機会だ。電話してついでに来月からの配達をお断りしよう！ピッポッパ！「はい！○○牛乳です！」とめちゃくちゃ感じのいいおっちゃんの声。集金袋の件を伝えると「それでご丁寧にお電話を?お忙しいに、わざわざすみません！お気になさらずに。また次回で結構ですよ。いつも本当にありがとうございます！今後ともよろしくお願い致します！」「あ、はい。こちらこそ、よろしくお願い致しますぅ～！」……ありゃー断れんかった～。ご主人…感じ良過ぎる！

よし！こうなったら先にＢ社さんの方を断ろう。

そしてタイミングを見計らっていたちょうどその時。いつもの配達担当の「控え目なおじさま」が突然「にこにこ笑顔のお姉さま」に変わった。毎回「おはようございます！」と元気ボイスが外から聞こえる。カチャカチャと空き瓶回収＆牛乳補充をリズミカルに済ませると、「ありがとうございました～♪」と爽やかな風のように車で去って行く。家の主が挨拶に出て行こうが行くまいが声のトーンは変わらない。しかも何かあるごとに牛乳の上には「小さなお手紙」がちょこんと乗っている。先日、チラシでおススメのお得な「業務用味噌汁」の注文書を入れておいたら「おはようございます。沢山ご注文ありがとうございます。最近暑くなってきたので体調にお気を付けください✿」と可愛い手書きのメモが入っていた。

断りづらいこと、この上ない。

八年ほど前、とある新聞で福島県のベテラン理容師さんが言っていた言葉を思い出しす。

『笑顔を忘れ、お客様の心を傷つけてしまうと「傷売」になり「消売」の憂き目を見ます。商売は「笑売」であり仕事に勝つ「勝売」なんです』

結局、Ａ社もＢ社も断りそびれてしまった。

二社それぞれのオーナーさんや担当者さんが「感じ悪い人」に代わる日まで、彼らの届けてくれる牛乳をありがたく、ちびちび味わって飲む日が続いてしまいそうだ。

オアフ島のマリークノール小学校を訪ねる

宮本富夫
（高松大学　名誉教授）

縁を得て、オアフ島のコオリナに滞在する。ラグーンに打ち寄せる波の音、時折聞こえる鳥の声、そよそよと吹く風。のんびり、ゆったりの空間。波と風のリズムを体に受け、心身ともにリフレッシュされることを願う。唯一の文化的活動は、妻が計画する小学校訪問。英語の補助員を務める関係で、授業用の資料を集めたいらしい。私は付き添い。

コオリナでお世話になった方の紹介でマリークノール小学校を訪ね、４年生のクラスで算数と理科の授業を見学する。授業の展開は、興味深かった。算数では小数点以下の数について学ぶ内容。例えば、二・一～二・二の間にある数を子どもたちに推理させ、小数第二位の数の世界を拡げていく。子どもたちは与えられた数字の間にどんな数があるかを推理し、手をあげて発表する。このことを繰り返す。数の世界は小数第三位へとつながっていく。子どもは推理することに一生懸命取り組む。小数点以下の数の世界をどんどん広げ、理解していく。理解の早い子どもに周りの子どもが引っ張られていく形で授業が展開していった。推理する力と集中して考える力も養われると感じた。

理科の授業は遺伝学の内容であった。授業のタイトルは“trait”、「形質」とか「特性」と訳される。教科書は厚く、イラストが多い。日本で使われている教科書と比べ、格段に厚い。興味のある子どもはどんどん読み進め、自分の力で学びを深めていくことが可能となっている。深めていくことに、限界線を引かないという考えが背景にあるのだろうか。めいめいが思い思いの表紙カバーをつけた教科書、大切に使い込まれている。

先生は教科書の一節をＯＨＣで映し出しながら、指名された子どもがその項を音読する。音読の後に質問を交えながらの説明が続く。音読、質問、説明の繰り返し。そして、その節の内容に沿って課された演習問題に取り組む。授業の出だしは、「なぜお父さんやお母さんに似るのか」という先生からの問いかけ。遺伝学の出発点ともいえる質問から始まる。遺伝子の組み合わせによって私たちの体の特性がつくられていることを、子どもたちが目に見える体の特性をたよりに確認していく。虹彩の色、髪の色、体重、身長、など。父親から半分、母親から半分もらってつくられる。「髪の色は染めて

いる場合があるかもね」と、
先生から一言。問いを繰り返し、答えさせながら、理解を進める。先生は正しく答えた子どもの答えをうまく取り上げる。間違えた子どもに無理な訂正を試みない。本人が別の子どもの正しい説明や先生の説明を聞いて自ら訂正できるようにと図る。無理な押し付けのない、気づきを大切にした授業の展開。演習問題の適切な答えは先生が文章を書き、ＯＨＣに映し出しながらまとめていく。話し言葉で対話する展開をとり、巧みに推理させ、理解を深めさせる。そして、書き言葉でまとめる。
予定した内容を終えると、授業は終了。残る時間はどうなるのだろうかと思っていると、理科から離れ、語彙を増やす内容の活動が展開していった。言葉を大切にし、語彙を豊かにしていく学習にエネルギーが注がれていると感じる。『はじめに言葉ありき』という、聖書の一節がなぜか思い浮かぶ。活動の展開は以下の通り。まず、子どもを一人、黒板に向かって立たせる。先生が手に持ったボードに単語を一つ書く。残りの子どもにその言葉の意味を表す別の言葉を考えさせ、発表させる。しかも一語で。子どもたちが、それぞれに考え、手を挙げ、発表する。的外れの言葉、二語以上の言葉が発表されると、ブーイング。大いに盛り上がる。二語以上だと容易だが、説明することになってしまう。一語で言い換えることはかなり難しい。一つのふさわしい単語が出てくると、その単語をもとに、黒板に向かって立つ子どもに、ボードに書いた言葉を当てさせる。発表が二語であったり、一語であったり、そのたびに、教室は盛り上がる。語彙を増やす上で効率の良い方法の一つであると思った。子どもたちの語彙の豊かさに驚く。楽しみながら、推理と集中思考に取り組む活動の成果なのだろうか。
子ども本人が望めばどんどん読み進め、自ら学びを深めることができる教科書はうらやましい。適切なイラスト、論理を通した簡潔かつ平易な表現でサイエンスの世界を知らせる。厚くなることは避けられないだろうが。ドイツのギムナジウム一年生が使っていた生物の教科書も厚く、内容は私が大学の教養課程時代に使った教科書のようであったと記憶する。当時のソビエト連邦との宇宙開発競争に遅れをとったＵＳＡにおいて、人材開発を目指してサイエンス教育の見直しが図られ、作成されたＢＳ　ＣＳの教科書。興味深く考えさせる内容と、随分と厚かったことを思い出す。
進行中の授業に二時間参加させていただき、学びについて考えさせられた。教室へのドア越しにしか内部の様子が見えない。そのドアが自動ロックで、出入り口の内側左の鍵かけに、赤い紐のついた鍵と青い紐のついた鍵がぶら下がる。子どもたちは、トイレ使用などで教室を出るさい、必ず、鍵を持って出入りする。少し奇異な感じを抱く。セキュリティを考えた上での対策の一つなのだろうか。確かめる機会は持てなかった。